

意味論に於ける科学的方法に就て

川 戸 好 武

序

「意味論」は語用論及構文論と併立する狭義に使はれる場合とそれ等三区分を内に含む広義に用ひられる場合とがある。広義の意味論は又「記号論」(semiotics)とも呼ばれる。此処で「意味論」と言ふのは広義のそれである。言語学的意味論と論理学的意味論とは狭義のそれに属するが、心理学的、認識論的、行動論的、哲学的等の限定詞の附せられる意味論は凡て広義に理解さるべきであらう。「一般意味論」も同様である。所で意味論乃至記号論は今日「科学」たることを標榜して、曖昧な哲学たることを潔しとしない。それ故「方法」としても「特殊科学の方法」(Ogden and Richards)或は「行動主義」(Ch. Morris)を探る。意味論に対する此の態度は必ずしも、哲学を言語の論理学的考察に限定して形而上学一般を否定する主張を伴なふものではない。モーリスの哲学に対する観方は初期の論理実証主義の見解に比すれば驚く程広やかで積極的である。筆者は哲学をば言語の論理的分析と見なす分析哲学の主張には左袒せず、哲学に対する態度に関してはモーリスに同調出来ると思ふ。だが、記号論の方法としては行動主義的方法を以て十分だと見なし、そのことに何等疑問の余地もないかの様に論じる点に対しては賛同し得ないの

である。筆者は哲学的意味論の主要型としてカッシラーの「象徴的形式の哲学」及それに続くアーバン(W. M. Urban)の哲学などを念頭においている。本小論の目的は意味論の科学的方法の批判を通じて哲学的意味論の可能性を側面から弁証しようとする点に在る。其の為に、オグデン・リチャーズの意味論、モーリスの記号論を此の順序に主として方法の点に力点をおいて考察し、次にB・ラッセルの意味論をその行動主義批判に焦点を合せて論究する。

第一章 オグデン・リチャーズの意味論

モーリスはオグデン・リチャーズの仕事を記号論の定礎的な仕事と認めつつも、英吉利経験論の流れを汲む「観念論」(Mentalism)を非難し、記号論を経験科学として確立すべく、その方法として行動主義を強調するのである。然し「The meaning of meaning」の著者達も、心像其の他の心的現象の存在を否定しないと云ふ点では、極端な行動主義者に同調はしないが、(同書二二頁)「記号の理論」又は「象徴の科学」(science of symbolism)と云ふ「新科学」(二四二頁)をば「特殊科学の方法」(V頁)に従って、他人の観察から展開しようとし、それ以外の方法は「独在論の袋路」へ導く(一九頁)と明言しているのである。彼等の「象徴の科学」は記号理論としてはモーリスの記号論に吸収されてより完成されたものに仕上げられたわけであるが、方法論の観点からすれば、モーリスが非難する所にこそ却って再考の余地がある。記号・思考(指示)・対象の関係を、彼等は周知の如く三角形で図示した。記号は思想(指示)を記号化(symbolize)し、記号と対象(被指示体 referent)との関係は指示を介しての間接的な、且又因果的な関係である。関係の此の間接性を明示すべく三角形の底辺は実線でなく点線で描かれる。彼等は特に、思考と対象との関係の特異性を仮定せず、思考を純粹に因果的に説明すべきことを強調する。それを「思考の自然的理論」(五〇頁)とか「指示の因果理論」(六五頁)と呼ぶ。「私がAを思惟する」と云ふことは「私の思考がAによつ

て生ぜられつゝある」といふことである。(五五頁) 外界の刺激が思考を、直接的には知覚を生じるのだが、知覚は有機体にとって単に受動的な印象付けではない。過去の刺激に対する有機体の適応の痕跡——心理学者 Semon 等の概念に従って *engramm* と呼ぶが、新たな印象の中に、既に経験したものの再現 (*recurrence*) を見出す。此のプロセスを「解釈」と言ふ。有機体はあらゆる知覚に方って、感覚器官の変様である与件群を解釈している。

凡ての知覚の中に記号状況が含まれている(二二頁)と云ふのは此の事情を指している。かうした「知覚の因果理論」では、感覚与件が感覚器官の変様(カントに於てもさうである)であるだけでなく、それらの把握(*apprehension of the apprehended*)も亦より複雑な神経組織の変様である。(八一頁) 色の如き、直接的に把握された網膜の変様は、対象と出来事 (*events*) との初次的記号であり、それらに基き、解釈によって発見される事物の性格(例へば机の形)は第二次、第三次の記号である。著者等は「解釈の典型」として、ルロイド・モーガンの鶏と毛虫の観察例(マツハもこれをあげている)をあげている。生れて間もない雛鶏は毛虫を一度ついばんでその何か(まづさ)を経験すると、それ以後毛虫を見ても二度とついばもうとはしない。これは、「見る」が、「見る」つかまへる「味ふ」と云ふ全脉絡の一部として、その再現が一度経験した以前の反応の代りとなり、それによって脉絡の他の部分を省略させる。これが凡ての解釈の型典だと云ふのである。(五二―五三頁) 著者達が記号状況に於ける「脉絡」を重視するのは正しい。所で、いくつかの出来事が一つの脉絡を形作ることは客観的事実だとしても、その中の一部によって他の凡てを代表せしめ、それによって代表された諸部分を起らずに済ませることは、主体(有機体)の解釈なしには起り得ない事である。「解釈」をどの様に定義するにせよ、解釈を問題とする限り、外部から観察出来る現象だけの考察に終始することは出来ない。「意味の意味」の共著者は、脉絡をば「外的脉絡」と「心理的脉絡」とに分つ。両者はどの様に関連するのかと云へば、外的脉絡の部分が経験の中に再現する時、因果的に結合された心

理的脉絡の元（メンバー）と結びつくことを通して、外的脉絡の余他のものの記号となる、（五七頁）のである。著者達は、知覚の二重意味（double sense）として、皮膚の内側の出来事と外部の出来事とを区別している。（一〇〇頁）だが外的脉絡と心理的脉絡とは皮膚の外部と内部として対立するのではない。鶏と毛虫の例では、「見る」（「姿」 sight）—「つかむ」—「味はぐ」（或は「味」 taste, tasting）は外的脉絡を形作ると言はれている。「見る」だけでは省略されるのはそれらが心理的脉絡に於て結合されている為だと謂ふ。此の例によつて観れば、脉絡の外的と心理的との区別は、皮膚の内外の別ではなく、外部から観察出来るか、否かと言ふ規準に依るものであらう。個々の出来事又は行動がある脉絡の要素となるのは、心理的脉絡を通してである。逆に心理的プロセスはそれによつて結合さるべき個々の契機なくしては脉絡とはなり得ないであらう。それ故、外的脉絡と心理的脉絡とは相即しつゝ有機体の知覚—解釈を形成する。外的脉絡と言っても思考（指示）の外部の事柄ではなく、解釈の一面面である。されば著者は言ふ、指示とは、心的プロセスを一つの被指示体（a referent）へ結びつける所の外的及心理的脉絡の集まりである、と。（九〇頁）

彼等は、最初に述べた如く、指示は因果的關係に還元可能だと主張する。思考の因果理論がヴィトゲンシュタインの、あり相もない仮定（思想と事物との共通構造の仮定）を不必要ならしめる、と謂ふ。（二五三頁）だが因果理論は「知覚のディレムマ」^{註(1)}（光学、音響学、生理学等からすれば、我々が知覚するものは、我々の外部のものではなく我々の内部の物や出来事である）を解決することは出来ない。問題はその性質上、快刀乱麻を断つ式の明快な解答は得られないとしても、意味論の考察の中には、かゝる問題に関する思索が当然含まるべきであらう。かうした思索の欠如の結果は、指示（作用）と被指示体との関連に就いての考察に於て、次の如く、明白な自己撞着として露呈されるのである。即ち著者は、最初に述べた様な方法的見地からして、指示を直接に比較する手段は存在せず、行為の

観察からの間接的証拠によって判断しなくてはならぬ、(九一頁及二〇六頁)と明言する。然し被指示体は指示を通して以外にそれを認識する術は存しないのである。彼等も極めて率直に次の意味のことを述べている、指示を通してのみ被指示体(対象)を認定(Identify)し得る。被指示体の同一性は、指示の類似性を通してのみ確保し得る。此の爲には、指示を「簡単な定義の道筋」(simple routes of definition)によって記号化することが望ましい。此の様に述べて、類似性、因果、空間、時間等を四つの主な道筋としてあげるのである。(一二七頁)

右の如き明白な自己矛盾が、それについての思索なしに放置されるのは、哲学的、論理的反省の不足に依ると考へる外はないであらう。

註一 Kyle, Dilemmas, p.109

第二章 モーリスの記号論

モーリスは、経験科学としての記号論の確立を目指して、厳格に行動主義的方法を貫かうとする。先づ記号行動(sign-behaviour)を記述する為に必要な名辭として次の四つをあげる。(cf. Signs, Language and Behavior)

(1) 予備刺激 (Preparatory stimulus) / 他の刺激に対する反応に対して影響を与える刺激、記号は予備刺激の一種である。

(2) 反応傾向 (disposition to respond) / ある条件を加へれば、ある反応が起る様な有機体の状態、予備刺激がかうした状態を生じる。

(3) 反応連鎖 (a response-sequence) / 刺激対象によって惹き起された反応から始まり、刺激対象を目標対象 (go

al-object)とする反応で終る一連の行動。

(4) 行動族 (behaviour-family) 、類似の反応連鎖の集まり。

之等四つの名辞によって、次の如き四つの「基礎的名辞」が説明される。

(1) 「解義者」 (interpreter) 、何かとそれに対して記号である所の有機体、例へば、ブザーに対する犬。

(2) 「解義状態」 (interpretant) 、記号によって解義者に惹き起される所の、ある行動族の反応連鎖を以て反応すべき反応傾向。

(3) 「被指示体」 (denotatum) 、記号によって惹き起された反応連鎖を、解義者が、それによって終らせる様な物。

(4) 「意義体」 (significatum) 、被指示体によって充たされる条件、被指示体が食物なら、意義体は食べられると云ふ条件。前者が「丸い四角」なら、意義体は丸くて四角形であると云ふ条件。

モーリスは、之等の基礎的名辞によって、言語を定義し、意味様式 (mode of signifying) を分類し、それに基いて記号の分類 (identifiers, designators, appraisors, prescriptors) と記号文 (ascriptors) の分類 (表示的、評価的、指令的、形式的) を行ひ、記号の四つの主用途 (情報的、価値的、誘発的、体系的) を定め、意味様式の分類と主要用途から、体系的に、説話の型を分類している。今、私は之等についての詳論を差し控へるが、モーリスの記号論は数学的論理学の成果を適宜に摂取し、(顕著な理論の一つをあげれば、「指示」 (denotation) と「意義」 (signification) の明別、後者は前者を含まない。) のみならず必要な場合にはそれを批判し、(特に、形式的真理と事実的真理とを二元的に異なった種類の真理とは考へない点) 全体として、論理実証主義の偏狭さを遙かに越えた包括的な体系性を得ている。筆者は、彼の、宗教、形而上学、哲学等の体系的位置付けに対して少なからず共感を覚えるのであるが此処では、その方法論を考察する。

最初にあげた予備的名辞と基礎的名辞とは、云ふまでもなく凡て行動主義心理学の概念・用語によって規定され説明されている。しかし少しく仔細に考察すれば、行動主義の装ひの下に、心的 (mental) 又は觀念論的 (mentalistic) 彼が非難する意味で) な実質・内容を持つ名辞が在ることに気付くのである。予備的名辞のグループの中では、②の反応傾向、基礎的名辞の中では、同じく二番目の「解義状態」がそれである。

反応傾向は予備刺激によって生じられた状態である。実験例では、鼠に音を聞かせておいて、衝撃刺激を加へると跳び上がり方が、音を聞かせない場合よりも増大する。此の際の、衝撃に先立つ音刺激を予備刺激と謂ひ、それによつて、その上にショックを加へれば、飛躍を増大する様にさせられている状態——之を反応傾向と称するのである。続いて二つの刺激を加へる際、先の刺激によつてそうした傾向が生じられる、又そのことにより当の刺激が予備刺激となると云ふことは、いくつかの観察例によつて、帰納的にのみ知られ得る事柄である。二つ目の刺激に対する反応が実際に起つてから、始めの刺激によつて生じられた状態を推理し得るのみであるから、後の刺激が与へられないか、刺激は与へられてもそれに対する反応が起らない場合には、先の刺激によつてそうした傾向が起されているか否かはその状態を「反応傾向」と呼ぼうと、ある心的状態として記述しようとは関りなく、決定出来ない筈である。「反応傾向」とはある心的状態の行動主義的別名に過ぎないのではないであらうか。

基礎的概念のグループの第二の「解義状態」に関しても、それが「反応傾向」によつて定義されている限り同じ事が言はれ得る。此の概念は興味ある前史を持っている。パース (Peirce) の一九〇六年の論文「Prolegomena to an Apology for Pragmatism」(「Monist」に掲載) が、「意味の意味」の附録 (B) に紹介されているが、それによるとパースに於ては、「記号が解義者たる「心に準ずる物」(Quasi-mind)の中に生じるもの、解義者を感情や努力や記号へと決定するその決定が「解義状態」である。パースは又解義状態を直接的、力動的、終局的の三つに分けてもい

るが、モーリスの概念は第二のもの（解釈の作用の中で経験される現実の出来事）から来ている様である。

モーリスの記号論の中で、意味様式の種類は、最も重要な部分であって、説話の型の種類の基礎をなす。意味様式の各々は、意義体の主要種類に対応する。所で、意義体と被指示体との区別は、フレイゲの「意味と意義について」(Frege: *Über Sinn und Bedeutung*, 1892) ラッセルの「指示に就いて」(Russell: *On Denoting*, 1905) などから発展された現代論理学の重要な成果に基いて居る。さて、いかなる記号も必ず意味作用を行ふ、即ち意義を持っているが、「指示する」(to denote)とは限らない。換言すれば、指示は意義に含まれるもの(imply)ではない。

(此の理論によって、プラトンのイデア論の如き意義の実体化を免かれるのである。) 意義体とは、モーリスの規定では、「何かがそれによって指示される条件」である。そして、今の問題にとって重要なのは、その意義体は必ず解義体を含むと云ふ点である。「丸い四角」の如き被指示体を持たぬ表現も意義は有している。それは、言葉の意味と普通に云れるものに他ならないが、「丸い四角」と云ふ言葉の意味は、解義者によって理解される限りでのみ存在する。その事をモーリスは、意義体は解義状態を含むと言ふのである。そして、意義体の種類が解義状態即ち反応傾向によって区別されるのである。記号—言葉は一種の予備刺激と見なされているのであるが言葉の意味の理解によって生じられる状態(つまり解義状態)は、極めて簡単な場合(命令に対する反応の如き)を除いては、モーリスが規定した意味での反応傾向と見なされるかは極めて疑はしいと言ふべきであらう。読書によって生じられる内的状態を決して反応傾向と見なし得ないとは言ひ得ぬとしても、それを、ショック刺激を与える前の音刺激によって生じられた鼠の状態と原理的にでも同一視することは、余りにも大雑把な類別化ではないであらうか。意味論(記号論)に於ける行動主義的方法は、意味論を経験的科学たらしめるのに必要且極めて有効な方法ではあらう。だが此の方法による記号論の展開の中には、心的或は観念的契機を、ただ行動主義の言語で書き代へたに過ぎないと言ひ得べき部分が

存在し、然もそれは、末梢的な所ではなく、基礎的な極念に於てさうなのである。凡そ、言葉の理解が問題とされる処で、心的な概念なしで済まさうとするあらゆる試みは始めから不成功に定められていのではないであらうか。モリスの記号論が、論理的数学的説話の取扱ひに於て多少強弁的な感を与えるのも故なしとしない。思考の行動主義的説明の理論として、モリスは、ミード (G. H. Mead) から「後—言語シムボル」 (Post-language Symbol) の理論を継承している。これはウォトソン (Watson) の「音にならない談話」 (subvocal talking) の理論を巧緻にしたものであるが、此処でそれに就いて詳論する必要はないであらう。

第三章 ラッセルの意味論

ラッセルは、知覚の因果理論を採る点では、オグデン・リチャーズやモリス、更に一般意味論の代表者達と異なる所はない。又言語の指示的使用 (demonstrative use) は行動主義の線で説明され得ることを認め、自らもその様に説明している。だがラッセルは、「心理学の哲学」としての行動主義の欠陥を、「哲学の輪郭」(アメリカ版では「哲学」一九二七年、そこで彼は行動主義を詳細に批判した) 以来終始変ることなく指摘し、且心像を重視する点で、「意味の意味」の著者達やモリスに比して際立った独自性を持っている。

ラッセルに依れば、言葉は幼児の時代から習得される意味によって対象を代表する、即ちシムボルの働きをする。対象語の意味は、それが意味する対象に直面することによって得られる。(「意味と真理の探求」二六頁) ラッセルは、「論理的原子論の哲学」(一九一八年) では、単語の意味は「直接知」 (acquaintance) によって知られる、と説明している。互いに似かよった対象と互いに似かよった音声との連合が幼児の心に出来上る時単語の意味が習得される。単語と対象との間の連合は、パークリー以来の問題である視覚と触覚との連合の如き、他の習慣的連合と丁度

同様である。（「意味と真理」一七頁）言葉の理解はクリケットの習得に克く似ていて、何れも習慣の事柄である。

（「心の分析」一九七頁）所で連合（或は連想）は、習慣や、心像、記憶、経験等と共に所謂「記憶的現象」（mnemonic phenomena）の異なった部類をなす。「記憶的現象」とは、既述（第一章）の心理学者ゼーモン^{註(4)}の概念であって、簡

単に言へば、過去の出来事を原因の一部とする有機体の反応のことである。第一章で言及した「痕跡」は、正にその様な原因となり得る過去の出来事に他ならない。連合とは、以前に経験したことのある何かを経験する時に、以前の経験の脉絡を喚び起す働きである。（同書七八―八〇頁）そこで、単語の意味は「記憶的因果的法則」によって形作ら

れる。（同書二一〇頁）其の上、ラッセルに於ては、「記憶的因果」は、唯物論的に、神経組織の物理的因果に還元出

来る、とされている。（同書三〇三頁）斯くて、単語の意味が習得されると、語は対象との連合によって、対象と同じ

「因果的効果」を得る。（同書二〇〇頁）例へば、オートバイだと叫ばれた人は、オートバイその物を見なくても道

を除ける行動を起す様に、語が実物と同じ影響を行動に与へるのである。此の様に、対象を目の前に見ている場合の語の用法―指示的用法―に於ては、語と意味との関係は、行動論的に説明され得る。と云ふのは、此の場合には、語の使用とそれに対する反応としての行動との関係が記憶的因果法則によって支配されるのである。（同一九八頁）しか

し、語に対する反応が行動として外部に表はれない様な語の使用―物語的使用法や想像的使用法―は、簡単に行動論的に説明することは困難である。モリスの行動主義的記号論は、既に触れた如く、論理―数学的説話の説明に於て同じ困難に打つかつてゐる。ラッセルは、物語的（narrative）及想像的使用法に於ける語の効果・影響を心像によって、文字通り「観念論的」（mentalistic）に説明するのである。

さて抑々心像は、ラッセルの心理学に於て極めて重要な位置を占めている。殊に「心の分析」（一九二一年）では当時共鳴していた「中性的一元論」（neutral monism）（Eマッハ、W・ジェイムス、新实在論等に略々共通な一種

の形而上学)の立場を背景にして、感覚は物理的及心的世界両方の共通の素材であるのに対し、心像は心的世界にのみ属し、従ってその独自の法則性を有している。感覚と心像とが心の凡ての素材を供給するのであって、認識現象のみでなく、意志や感情の類も凡ていろ／＼な仕方に関係した感覚と心像の集まり及その性質として説明されるのである。「心の分析」の心理学は斯様に「中性的一元論」を背景にしているが、ラッセルの心像の理論にはそうした形而上学から独立な学問的要素がある。中性的一元論の立場は彼に於ても長い生命を保ち得なかったが、彼の心像の心理学は後々まで保有されている。

心像は最も簡単には、感覚(ヒュームの印象)の写しであって、その限りで記憶的現象の一部類なのである。(同書八〇頁)感覚と心像とはその原因と結果に関して区別される。感覚は物理的原因のみを持つのに対し、心像は物理的原因をも持ち得るが、主として記憶的原因(mnemonic cause)を持つ。(連合を通して、感覚又は他の心像によって生じられること。)結果に関しては、感覚は一般に物理的結果と心的結果の両方を持つ。それに反し心像は身体運動を生じたとしても、それは記憶的法則によってである。語の物語的及想像的用法に於ては、行動論の言語では説明し難い事象が存するのであって、それらは心像によって最適に説明される。ウォットソンの如き極端な行動主義者が内省の不可能といふ理論の為に心像の如き誰でも経験している平明な事実を否定するのは不合理だとラッセルは反論するのである。

ラッセルに於て心像がいかに重視されているかは、彼がJ・ロックの先蹤^{註(一)}に従って、語の文と竝んで、心像だけから成る心像命題(image proposition)を認め、語の文と異なり、心像文は無意味を含まぬと指摘する(意味と真理「一八三頁」)だけでなく、一般に、文の意味を複合的心像に存すると考へている処に一層端的に窺はれるのである。文は単語の意義と構文規則さへ知って居れば今まで一度も出遭ったことない文でも理解出来る。しかし文は偽である場

合もあるが故に、文の意味は、文を真又偽ならしめる事実ではあり得ない。それは心理的な出来事である。文の断定を信じる者の状態であり、「類似の複合心像の集まり」である。（「心の分析」二三三頁、「意味と真理」一八九頁）更にラッセルは、恰もバークリー^{註(4)}に唱和するかの如く、哲学に於ける伝統的な用語の専制の危険を警告し、そうした誤りを防ぐ為に、一寸語を追ひ払って事実をもっと直接的に心像を通して思索することを勤めている、（「心の分析」一二頁）のである。

しかし斯様に心像を重視するとは云へ、心像は言葉に表現出来ぬ類の現実の再現である、と云ふ様な主張にはラッセルは同意しない。心像は漠然としていて断片的であり、その重要な特徴は凡て言葉に表現される。言葉に充分に表現出来ぬ類の具体的細部の豊かさを持たないのである。（「心の分析」二四〇頁）ラッセルは勿論「数学原理」の著者として、高度に知的な仕事に於ける言語その他の記号の不可欠な重要性は他の誰よりも克く承知しているのであって一切のシムボルを排して事物との直接的融合に訴へるが如き神秘主義に墮する可能性は彼にとって存在しなかったのである。

さて、「意味の意味」の著者達がラッセルの見解に同調する点の多いらしい事は彼等の表現の仕方から推察される。例へば記号の正しさについて、ラッセルは、語は平均した聞手が、話し手の意図する仕方、それによって影響される時正しく用ひられると謂ふ、これが正しさの心理学的定義だと述べている。（「心の分析」一九八頁）オグデン等も、記号及至シムボルは、適当な解釈者の中に類似の指示を生じる時指示を正しく記録する、と云ふ。（「意味の意味」一〇二頁）所が、かうした一致点にも拘らず、彼等は、主として、心像はそれが起っているか否かを確認し難いと云ふ行動論的な理由によって、此の概念を用ひるのを避けた。（同書六〇頁）そして、解釈の理論に於て心像を隅石たらしめない点が、ラッセルの意味論との主なる相違点だと明言している。（同書六二頁）だが、そうした方法的着

意にも拘らず、彼等が、指示と被指示体との関連について明な自己矛盾に陥っていることは既述した通りである。是に反して、心像を謂はば正面中央の座に据えたラッセルには、知識論上の根拠が明確に自覚されていた。

ラッセルの知識論上の立場は、初期の「論理的構成」の理論から、後のかなり唯物論的な見解まで、四十年に亘る長い間に様々な変化を辿っているが、対象は我々の感覚器官や神経組織の変様を通してしか認識され得ないと云ふ知覚の因果説に基づく根本見解に関する限りでは始ど変化していない部分が在る。我々の知る物は凡て被知覚体 (percepts) である、(「意味と真理」二八六頁)と言ふ立場から行動主義は次の様に批判される。行動主義者が外界についての観察を記録していると考へる時、實際は彼の内に起りつゝある出来事の観察を記録しているのだ、と。(同書一五頁) 行動主義に対する此の批判の仕方は、「哲学の輪郭」(一九二七年)に於ける批判の反復である。そうして行動主義は元来自然科学の方法を心理現象の研究へ適用しようとする「心理学の哲学」(「心の分析」二三〇頁)であつて行動主義に対する批判は、自然科学そのものの知識論的前提に対する全般的批判の一部に過ぎないのである。物理学は、素朴实在論(事物はそう見える通りの物である)から出発してその否定に到達する。素朴实在論は物理学へ導き、物理学は、若しそれが真なら、素朴实在論が偽なることを示す、故に素朴实在論は若し真なら偽である、故にそれは偽である。(「意味と真理」一五頁)(此の推理は論理学の所謂「背理への還元」(reductio ad absurdum)である)。そこで、心理学の行動論哲学は、方法上多くの点で讃嘆すべきであるが、不十分な物理学の哲学に基いているが故に結極失敗している、(「心の分析」二三〇頁)と云ふ結論に落着くのである。

註一 Hayakawa, Language in thought and action, P.167

註二 Senon, Die Mneme, 1904, Die mnemische Empfindungen 1909

註三 J. Locke, Essay concerning Human Understanding, BKIV. chap. V.

註四 G. Berkeley, Principles of Human Knowledge, Introduction XL.

要約と結語

オグデン・リチャーズの「特殊科学の方法」も、モーリスの行動主義の方法も、等しく、意味の理論を科学的たらしめようとの意図から発している。殊に後者は、前者にはまだ色濃く残存している所の観念主義 (mentalism) 的概念の払拭を目指していた。然しモーリスの記号論は、確かに、科学的方法の方向に於て一層徹底したには違ひないけれども、心的、観念的なものを単に行動論の用語で言い換へたに過ぎないと見られる点があった。物理学的諸科学に於て既に確立されている科学的方法の一部（此処では外からの観察と因果的説明と言ふ極めて一般的且初歩的な部分に過ぎないが）を新たな意味の分野に適用することによって、科学的意味論の確立へ歩を進み得ることは、モーリス等の秀れた仕事によって充分に認められる所である。だが、意味の理解が中心問題である場合に、心的、観念的な概念をどこまでも排除しようとする所に疑問の余地がある。此の点でラッセルの心像の心理学が依然として価値を持つと思ふ。結局、記号と対象（被指示体）との二項だけでは、記号現象は説明し尽されず、指示（思考）の働きがあらはれて、記号用具が記号となり、対象を指示し得るのであらう。記号（言語）なしに思考は行れ得ないであらうが、記号は本来思考の道具たるべく、作られたものであるとして、記号と対象のみが客観的に観察可能だからと云ふ理由で、思考なしで済まざうとするのは文字通り本末顛倒であらう。オグデン・リチャーズは、その思考を因果的に説明しようとした。所が説明項たるべき対象そのものが思考を通して以外には知られ得ないことを認めざるを得なかった。此処で彼等ははしなくも哲学的反省の不備を露呈したのであった。

「知覚のディレムマ」にかゝる反省の欠如と言ふ点では行動主義の方法論も同様である。行動主義に対するラッセルの批判をあげたのは、ラッセルの立場に賛成するからではない。行動主義に対する哲学的批判の一例としてあげ

たに過ぎない。ラッセル自身も知覚の因果説に立脚している。ラッセルにとって、知覚の因果説は、これを疑の中に投げ込み得る様なものは考へられないのである。^{註一}勿論誰も因果法別を疑ふことはしない。だがそのことから必ずしも知覚の因果説が知覚の問題に関する最後の、決定的な動かすべからざる唯一の理論だと云ふことは帰結しない。光学的、生理学的理論に基づく知覚の因果説は、凡ての科学理論が複雑な實在に對してさうである様に、知覚現象の抽象的理論に過ぎないと言ひ得るであらう。私が何かを見る、と言ふことは、私の視知覚が一定のプロセスを経て対象と光に論よつて感覺器官に生じられた、と云ふことと同じではない、と言ひ得るであらう。^{註二}特定の科学理論の説明を以て、現象の凡てを尽していると思ふのは恐らく、陥り易い過信ではないであらうか。

だが、科学の仮定に対する哲学的反省なしには、科学は科学として不充分であるとか、況んや科学として成立ち得ない、などと言ふのでないことは断るまでもない。ラッセルが行動主義を「心理学の哲学」と見なしてそれを批判した様に、意味論の哲学的部分に對して、哲学的批判を試みたに過ぎない。記号論は既に科学たるの地位を確保した、と言ふ見解がある。若しさうなら、それはそれで大いに慶賀すべき事柄であつて、後から足を引張る類の行為に出るのは恥づべきである。しかし、その場合でも科学の仲間入りをした記号論の前提に對して哲学的反省を行ふことは可能だし又必要であらう。それは殊に、意味の科学的理論を標榜するものが、多くは、自然主義的に、^{註三}動物の記号行動と人間の言語活動との間に質的差異を認めず、動物に於ける実験結果をその儘人間の言語現象の説明に適用しようとする傾向に對してである。オグデン・リチャーズ、特にモーリスに於て此の傾向は顯著である。と云つて、人間と動物との間に實際以上に大きな断絶を仮定する虚構的形而上學に對しても警戒すべきであらう。

意味論は、広い範圍に亘る言語理論の一部である。言語理論は論理學的考察をも含むべきであつて、モーリスが現代論理學の成果を記号論の中に摂取した巧みな仕方は一つの範型とするに足りると思ふ。ただ論理學の人工的言語や

論理学的意味論（タルスキ、カルナップ）などが、言語理論の発展に積極的にプラスし得るか否かを筆者は疑ふのである。カルナップは、人工言語の自然言語に対する関係は科学の自然現象に対する関係と類比的だと言ふ。果してそうであらうか。筆者の見解では、自然言語そのものの「生成」にもっと関心を向けることが必要であつて、その点では言語学の諸部門から知識を仰ぐべきだと思ふ。

言語の理論—言語哲学に於ては、先程触れかけたが、先づ思考—記号—対象と云ふ三者の關係に根本的な思索を凝らすべきである。「知覚のディレムマ」を克服すべき考へ方の一つの典型は、夙にカッシーの「象徴的形式の哲学」に於て見出されるであらう。

註一 Philosophy of B. Russell edit. by Schilpp, Reply to criticism.

註二 Ryle, Dilemmas, chap. VII Perception.

註三 cf. W. M. Urban, Language and Reality. P. 129